

小嶋孝三郎君を思う

和田繁二郎

六〇

小嶋孝三郎君がオノマトベを研究し始めたのは、彼が大学在学中ではなかったかと思う。というのは、私は彼と昭和十九年の春から二十一年の春まで、立命館第一中学校の教員室で机を並べていたのであるが、その時、何度かオノマトベ（当時は擬声語と言っていた）の説を聞かされた記憶があるのである。その後、二十四年になって、『説林』という研究誌を刊行するようになってから、それに参加し、最初の論文「擬声語の言語的性格」を二十六年六月号と十一月号に連載発表している。この時から数えても、二十年の歳月がたっている。実に、オノマトベ研究は、彼のライフワークであったのである。

中学校の教員室時代から、かなり熱のこもった口吻で、擬声語の面白さと問題性を聞かされ、時には少々辟易した記憶さえある。もっとも、それは私が国語学・言語学

には素人であったせいもあるが、素人の私をつかまえてはなさなかったところに、小嶋君の情熱もあったというものであろう。

話に聞くと、君は会議の時など、必ず一度は発言して、しかるべき相手に食ってかかったということである。その結果、末川名譽総長も、細野総長もはつきり記憶にとどめられているということである。これはおそらく、自分の納得のいかないことは、あくまで究明し、また、受入れられない自己はどこまでも闡明しようとする誠実さ、真面目さの致すところだと思ふ。

しかし、私はこういうエピソードを聞いて、少々意外な感じがした。右に、擬声語についていろいろ聞かされたことは言いたが、その間には、食ってかかれたという印象が全くなかったからである。君はむしろ謙虚でさえあった。たしか、君の研究がかなり進んで、現代

短歌におけるオノマトベを手がけていたころだと思ふが、二度ばかり発表前の原稿を持参されたことがあった。いま「業績目録抄」を見ると、三十四年から三十八年ごろにその種の論文が発表されているから、およそ十年程も昔のことになるろう。その原稿は、右のように現代短歌のことだから、私としては門外漢という訳にゆかず、本気になつていぬいに読んだ。君の論は、オノマトベのもつ詩的表現の効果について考察していたので、とくに私の関心をひいたこともある。結果、かなり厳しい批評をした。その時、君はその私の批評にほとんど反撥しなかった。二三の釈明めいた説明をしただけだったと記憶している。そうして、再度、原稿を書きなおして見せて呉れた。ことと学問に関しては、全く謙虚な君であったのである。それは、やはり、君のオノマトベ研究の熱意が本物であったからだったろうと思ふ。

それから後も、君とオノマトベについて語ることは多かった。君の業績は着々と積み重ねられていったからである。おかげで、

話しのうちにオノマトベについてひと通りの知識をもつことができた。

君の話す声はどちらかというと、低くて少し不鮮明なところがあった。これは私が難聴であるせいだったかもしれないが、雑談の際には、しばしば、聞きなおすことがあった。ところが、ことオノマトベのことになるに俄然、声高になって姿勢も正して滔々と語る。聞きかえす必要は全くなかった。平素の眼鏡の奥のいくらか柔和な目が光を増してくる。舌なめずりをしながら話す。なつかしい顔だ。

君はいわゆるガリガリで一見健康には見えなかった。何度か一緒に旅行をしたことがあったが、温泉の湯槽のなかの君の胸は洗濯板のようだった。平素のあのエネルギーッシュなものがどこにあるのかと疑われた。しかし、君は健康で、野球などもたしなんでいた。その結果なのだろう。野球部長という、今から言えば忌しい職についてしまった。野球部長になってしばらくして、君は少し陽にやけた元気な顔をみせたことがあった。「えらい肥えたね。野球ばかり

してるさかいやな」と言った。君は「ぎついこと言やはる。勉強してへん訳でもないのやけど……」と苦笑して言った。私は別に、とがめるつもりはなく、むしろ健康美を賞するつもりだったので、少々弁解したことがあった。実際、研究には健康が必要である。私など常に健康に危機を感じているので、君の健康そうな顔つきに祝福したい気持だったのである。君はなかなか野球部長はやめなかったが、研究の方も怠らざうとう出版にまでこぎつけた。

研究は出版で一応完成する。出版は研究

小嶋孝三郎先生の追憶

「えっ！ 小嶋先生が交通事故で!! 今、浜田病院に、(容態は?)……外傷はないが、内出血のおそれがある?!」所用で事務室のドアをあけたとたんに、電話応待者の復唱が、耳に突き刺さるように飛び込んできた。愕然として、私はその場に佇立してしまった。全身の血がすーっとひいていくよ

者の生がいである。君はどれだけその著書の出るのを待っていたか。その書物を見ずに逝ってしまった君の心情を思うとたまらなくなる。奥さんやお子さんの気持もいかにばかりかと思う。しかし、いま君の師の手で後記も書かれ、立派な書物になった。そして、店頭にも、また研究室や図書館の書架にちゃんと並んでいる。あの世から君はそれを見て喜んでるに違いない。君の霊の安らかならんことを祈るばかりである。

(四八・一・一二)

山崎利雄

うに感じられた。「……四時二十分頃、御園橋の西で……クリーニング屋の普通乗用車が、ニュートンしようとして、接触……、小嶋先生はバイクから飛ばされて、転倒……、コンクリートの溝蓋の角で、頭を強く打っているらしい?!」それは、新学期が始まって間もない四月十二日、硬式野球部の